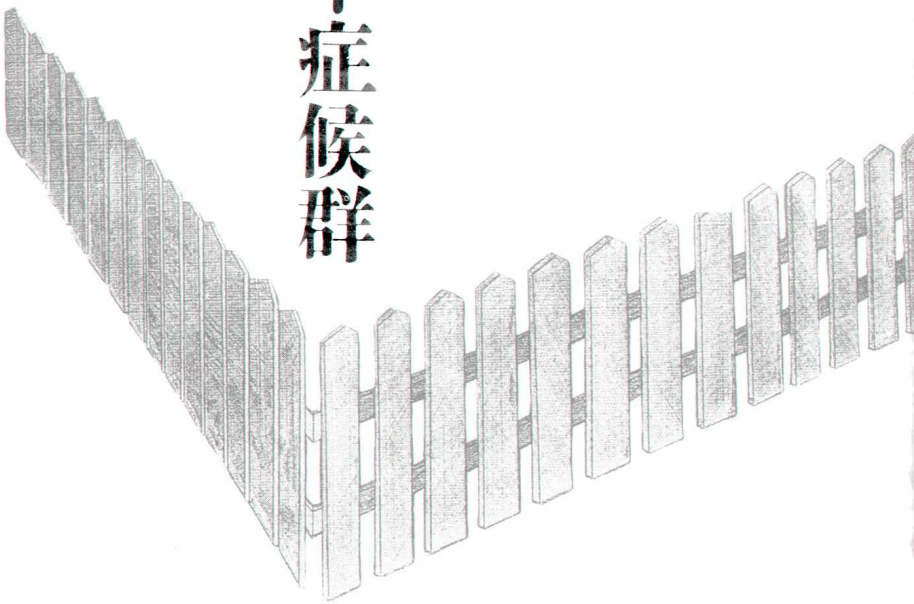
クリヴィツキー症候群

逢坂剛

新潮社

逢坂剛

ヴィツキー症候群



新潮社

クリヴィツキー症候群（しょうこうぐん）

定価1100円

昭和六十二年一月二十日発行
昭和六十二年二月五日二刷

著者　逢坂剛（おうさか　ごう）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社　郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八番

印刷　東洋印刷株式会社

製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© GŌ ŌSAKA, Printed in Japan, 1987

CONTENTS

謀略のマジック 5
遠い国から来た男 67
オルロフの遺産 97
幻影ブルネーテに消ゆ 149
クリヴィツキー症候群 193

装幀　戸出恵美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

クリヴィツキー症候群

謀略のマジック

一

国電の御茶ノ水駅から徒歩五分という、近さだけが取り柄の古いビルの四階に、松川英三とわたしの共同事務所「現代調査研究所」がある。曙ビルという名のそれは、文化学院、駿台予備校、浜田病院といった人の出入りの激しい建物に囲まれた一郭にあり、幅一メートル足らずの細い路地によってかろうじて現代社会とつながる前世紀の遺物だった。

四階まで上がると、このビルの中で唯一まともな看板を出している「桂本忠昭法律事務所」の扉があき、秘書の広瀬由里がいかにも秘密めかした仕草で手招きした。桂本弁護士とは、松川とわたしが二人とも出払っているとき、切り替えボタンで電話を受けてもらう契約を取り交わしている。由里はそうした電話応答サービスを引き受けてくれるほか、桂本の目を盗んでは複写機を使わせてくれたり、茶菓のサービスをしてくれたりする気立てのいい女だ。年は三十に近いが、まだ独身だった。

由里の様子で桂本がいないことが分かったので、わたしは事務所にはいった。由里が声をひそめて言う。

「岡坂さんに凄い美人のお客さんよ」

わたしは振り向き、反対側の奥にある現代調査研究所の扉を見た。それは羽目板が一部そり返って

いたが、まだ無事に残っていた。その扉がタイミングよく開き、松川英三がきびきびした足取りでやって来た。事務所にはいり、扉をしめると、低い声で言う。
「おまえも隅に置けないな。たまにおれが先に来るとこれだよ。まあ、とんだ目の保養をさせてもらったがね」
松川はわたしの大学時代の同期生で、年齢は二つ上の三十七歳だった。中背で華奢な体つきだが、色が白く目鼻立ちのきりりとした好男子で、若いころから女に不自由したことがない。そのためにまだ結婚せずにいるが、女に不自由して独身でいるわたしに比べれば恵まれた方だ。
「心当たりがないな。なんの用か言っていたか」
「仕事を頼みたいような口振りだったよ」
「確かにおれを訪ねて来たのか」
「ああ、名指しでな。ちょっと信じられんことだが」
「どんな女だ」
「黒貂のコートを着て、黒いしゃれた帽子をかぶった、ひどく古風な感じの女だ。下着までは見なかったがね」
由里は聞こえなかったようなふりをしたが、かすかに頬を染めて自分のデスクについた。わざとらしく書類を広げ始める。松川は眉を上げ、顎をしゃくってわたしを廊下に連れ出すと、扉をしめた。声をひそめる。
「金蔓だぞ、見たところ。精一杯愛想よく話を聞いてやるんだ。足ながおじさんになったつもりでな」
松川の生家は貧しく、大学の学費はすべて自分でアルバイトと博打で稼ぎ出したのだった。そのた

めか金銭に対する執着が異常に強く、そんな松川の性格を嫌う者も多かった。それについては三年前、松川に誘われて二人で事務所を開いたときから、ある程度覚悟していた。しかしお互いの仕事には口を出さないというのが、最低限の約束だったはずだ。

わたしは返事をせず、事務所に向かった。

南側の窓際に、電話台を挟んで向き合うデスクが二つ。西側の壁にスチールキャビネット。扉と並ぶ北側の壁に同じくスチールの書棚。東側には年代物の大きな木の衝立が立っており、その向こうには一度もシーツを取り替えたことのない古い簡易ベッドが据えつけてある。そして残りのスペースを塞ぐように、ソファとテーブルの四点応接セット。

そのソファにすわっているのは、まさに一九三〇年代のハリウッド映画から抜け出たような、不思議な女だった。女はわたしを見ると、長いつけ睫毛を蜂鳥のようにせわしく瞬きさせ、優雅な身のこなしで立ち上がった。黒の丸い帽子、黒のテーラードスーツに、胸元にフリルのついた白いブラウス。背丈は中くらいだが、腰ははっとするほどくびれ、胸と尻の豊かさをいやでも強調している。丹念にメークアップされた顔はエキゾチックな美しさをたたえ、目が真一文字にわたしを見据える。

わたしが口を開く前に、松川が間に割り込んだ。

「ええと、これがパートナーの岡坂神策君です。こちらはこうやまくにこさん。香る山にお城の子と書くのだそうだ」

「はじめまして」

香山城子はやや上ずった声で言い、ハンケチを口に当てて小さく咳払いした。その仕草には、思わず靴の先にキスしたくなるような気品があふれていた。

わたしたちは揃ってソファに腰を下ろした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松川はわたしを見た。
「ぼくが代わりにお話をうかがってもよかったんだが、どうしてもきみに直接話したいとおっしゃるのでね」
わたしは城子を見た。
「お待たせしてすいませんでした。失礼ですが、どこかでお目にかかりましたか」
「ええ。二日前に、明央大学の第八集会室で」
明央大学は、ここから歩いて数分のところにある私立大学だ。そこの第八集会室で、二日前の夜スペイン内戦に関するシンポジウムがあり、確かにわたしはその集いに顔を出した。別に仕事の取材というわけではなく、自分の興味で出席したのだ。
「あなたもあのシンポジウムに参加されたんですか」
「ええ。ずいぶん人が集まりましたわね。あんなに大勢の人がスペイン内戦に関心を持っているなんて、思ってもみませんでしたわ」
「会場が狭かったからそう見えただけですよ。広い場所でやっても、集まる人数は同じなんです」
城子はハンケチを口に当て、咳払いした。
「岡坂さんは何度か手を上げて、パネラーの人たちに質問されましたわね。それも彼ら専門家がたじたじとなるような鋭い質問を」
松川が口を挟んだ。
「こう言っちゃなんですが、岡坂君のスペインに関する造詣の深さは並みのものじゃない。生半可な現代史学者なんか、とても太刀打ちできませんよ」
城子はわたしを見たままうなずいた。

「それであなたのお顔を覚えましたの」
「しかしよく名前まで分かりましたね」
「それは——主催者がシンポジウムの終わったあと、レポート希望者はノートに住所氏名を記入するようにと、そう言いましたでしょう。ですからわたくし、あなたの後ろについて備えつけのノートのところへ行きましたの」
松川は指をぱちんと鳴らし、テーブルに乗り出した。
「なるほど、そのとき岡坂君は現調研、つまりこの事務所の住所を書いた。それを頭に入れたあなたは、ここを尋ね当てて来たというわけだ」
「ええ」
「そこまで岡坂君にご執心とは、よほど重大な用件なのでしょうね」
城子はちょっとためらった。
「あの、こちらでは、どんな調査でも引き受けていただけるのでしょうか」
「もちろん、看板どおり調査もやれば研究もやります。しかしそれだけじゃありません。タレント本のゴーストライター、翻訳の下請け、予備校の試験問題作り、出版社の校閲、頼まれればベビーシッターだってやります。あなたが何を頼もうとしているにせよ、かならずわたしたちがお役に立てるはずですよ」
城子はきっぱりと言った。
「わたくしは、岡坂さんにお願いしようとしているのです」
ほとんど間のテーブルによじ登りかけていた松川は、ばつが悪そうに体を引いた。
「もちろんです。わたしはただ、お手伝いできることがあれば遠慮なく言ってほしいと、そう申しあ

げているだけでしてね。どうぞお二人で話を続けてください」
窓際の自分のデスクに向かう松川を、城子は不安そうに目で追った。松川は椅子にすわると、屈託のない笑顔を向けた。
「さあ、始めたり始めたり。わたしのことは気にせずに、ポストが立ってるとでも思ってください」
そう言うなり、猛烈な勢いで原稿書きを始めた。松川の筆運びは凄まじく、きつつきのような音を立てながら一時間に十枚のスピードで書き飛ばして行く。
城子は改めて口を開いた。
「岡坂さんがスペイン内戦にお詳しいことは分かりましたが、第二次大戦中のスペイン、とくに日本とスペインの関係についてもよくご存じでしょうか」
「それはむずかしい質問ですね。第二次大戦中フランコ総統は中立を守ったけれども、内戦のときヒトラーやムソリーニに援助を受けた関係から、政策的には枢軸国寄りだった。したがって日本との関係も悪くなかったと思いますよ。何が知りたいんですか」
城子は鮮かなルージュに彩られた唇に軽く舌先を這わせ、早口で言った。
「第二次大戦中に、スペインが日本のためにアメリカでスパイ活動を行なった、という話をお聞きになったことはありませんか」

2

きつつきの音が一瞬止まり、また始まった。ふだんあまり効きめのないスチーム暖房が、急に暑苦しく感じられた。

「いや。残念ですが」
城子は目を伏せ、ハンケチを口元に当てた。顔にありありと失望の色が浮かぶ。
「やはりそうですか。あのシンポジウムのあと、パネラーのかたたちにもお尋ねしてみたのですが、やはりご存じありませんでした。どうしてかしら」
「まあ彼らの多くは、内戦以外のテーマにあまり興味を持たないから——。しかしスペインが日本のスパイを務めていたなんてわたしも初耳だし、ちょっと信じられませんね。何か確たる根拠でもあるのなら別ですが」
城子は角型のハンドバッグに手を入れた。
「その根拠はここにありますわ」
城子が取り出したのは、黄ばんだ新聞記事の切り抜きだった。手に取って見る。一九七八年（昭和五十三年）九月十一日付の読売新聞の朝刊だった。五段抜きの大見出しが目に飛び込む。

スペインが日本のスパイ役
第二次大戦中、米で暗躍
米は見て見ぬふり（公開文書でわかる）

頭は〔ワシントン十日＝浅井特派員〕となっており、その記事が外国の通信社から送られて来た外電ではなく、いわゆる特電であることを示していた。手がじわりと汗ばむ。
「なるほど、おっしゃるとおりですね。これは驚いた」
わたしは急いで記事を読み始めた。
「十日付のワシントン・ポスト紙は、日本が第二次大戦中、ワシントンにあるスペイン大使館の

スタッフを中心とするスパイ網を組織していた、と報じた。米国は、日本の暗号を解読してその存在をつきとめたが、暗号解読の事実を日本側に知られないようわざと摘発せず、いやがらせをする程度にとどめた。このスパイ網についての資料と記録（三万ページ）は、暗号解読を任務とする国家安全庁（NSA）に保管されたが、このほど解禁となり、ワシントンの国立公文書館に引き渡されたという。

同紙によると、スパイ組織は『戸』という暗号名を持っていた。日本は、真珠湾攻撃の三日後に『戸』の結成に着手した。開戦に伴う日米国交断絶で、ワシントンの日本大使館が引き揚げることになった際、日本側は、壁にはめ込まれた金庫の中に五十万ドルを隠し残した。やがて、利益代表国となったスペインが日本大使館を管理するようになり、壁の中の五十万ドルがスパイ組織の活動資金にあてられた。

スパイ組織は、米国内に『少なくとも六人、おそらく八人』のメンバーを持っていた。その中にはスペイン大使館の武官のほか、ニューオーリンズ、ニューヨーク、サンフランシスコなど主要港の領事やスペイン人記者なども含まれていた。これらの領事たちは、船舶の動きについて情報を集めた。（中略）

こうした情報の多くはスペインの首都マドリードに送られ、組織のボス（氏名不詳のスペイン人）と日本のスペイン駐在公使が受け取った。組織全体はマドリードからの指令で動いていた。

米国は日本の暗号解読によって、かなり早くから組織のほぼ全容をつかんでいたが、組織の全面破壊に乗り出すと暗号解読の事実が日本側にわかってしまい、解読した暗号によって日本側の重要情報をキャッチできなくなるので、警戒しつつ泳がせていた。――」

さらに記事は、一九四三年（昭和十八年）の四月六日に組織のボスとスペインの元外相が、米国大使

館に雇われた無頼漢に散歩中襲われて命拾いしたことや、日本が活動資金としてアルゼンチン経由で米国に送った二袋の「御木本パール」が、途中で消え失せた事件などを伝えていた。

わたしは切り抜きをテーブルに置いた。城子は食い入るようにわたしを見つめた。

「どうお思いですかしら、その記事」

「まさに奇想天外なお話ですね。スパイ小説の読み過ぎじゃないかという気もするけど、世界的に知られた大新聞が、二紙も揃ってでまかせを書くとは考えられない。ここにあるとおり、第二次大戦中確かにスペインは日本のためにスパイ活動を行なったのでしょう。さてそこで、スペイン現代史を売り物にしながらそれを知らなかったこのわたしに、まだご用がおありですか」

城子はまたせわしく瞬きした。

「あなたはこの記事に興味が湧かないとおっしゃるの」

「いや、そうは言いません。大いに興味があります。この記事はおよそ三年半前のものですが、そのとき見ていたら血眼になって真偽を確かめていたでしょう」

「どうして見落としてしまったんですか。当然スペインに関連のある報道は、まめにチェックしてらっしゃるんでしょう」

「まあね。今記憶をたどってみたんですが、昭和五十三年の九月というと、わたしは仕事で東南アジアへ行っていて日本にいなかったんです。まだサラリーマンをしていたころですがね。確か九月上旬から三週間ぐらいだった。帰って来てから、留守中の新聞をチェックするのを怠ったんですよ」

城子はうなずいた。

「それでしたら、改めてあなたに調べていただきたいんです」

「調べる。何をですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com